

「日独医学交流の 300 年」 300 Jahre deutsch-japanische Beziehungen in der Medizin

エルンスト・クラス/比企能樹 編(ドイツ語対訳)

北里大学名誉教授

岡 部 治 弥

明治2年、新政府によりドイツ医学を取り入れることが決定されて以来、第2次世界大戦が終了するまでの約80年間、日独医学の交流は極めて密接であったことを知らない医者はないであろうが、更にその二百数十年前に溯ってオランダ医学(蘭学)と言われてきたものが、実はドイツ医学に端を発し、またドイツ人医師が蘭医と詐称して来日していたこと、言ってみれば日本における西洋医学の淵源はドイツ医学であったことを知る人は少ないであろう。

今回、畏友比企教授より本書を手渡され、表題をみて年数の多さに、まず意外な感じを受けた。また、この3年ほどはお互いに少し離れた戦場にいるが、時々会っていたにもかかわらず、このような本の企画を進めていることは全く知らなかったの、見るからに堅牢なドイツ装丁の本を手を受けたときには大変驚いた。聞けば、この本は数年前に、氏の親友であるクラス教授からの相談を受け、両人でいろいろ企画を練り、苦労を重ねてきてついに完成したものであり、その間助手を務めた夫人もドイツ語論文内に現れる日本

人名の同定に大変な時間と苦労をしたとのことであり、夫妻共々の労作に心からお祝いの言葉を述べた。ほどなく、出版社から、書評の依頼状が送られてきた、その依頼状には、この書の特徴が実に簡潔、適切に記述されていた。すなわち、“本書は、日本とドイツの医学を巡る300年に亘る交流関係を、医学の現場にある両国の50人がドイツ語と日本語で纏めた、他に例を見ない力作です。遠く離れた2つの国の間で、このような協力関係が医学という一分野を巡って連綿と築かれたという歴史には誠に興味深いものがあります。これまでに纏まった形では公開されることのなかった歴史の一コマを後世に残し、今後の学問に於ける国際協力の在り方を考える一つのヒントを本書が投げ掛けることができれば、とスタッフ一同願っております”とあり、まさにそのとおりと言えよう。

本書は約300ページ、日独医学交流300年(実はドイツ人外科医師カスパーの来日からは343年に溯ることが本書内の表でわかる)にわたる医学交流の歴史が豊富かつ貴重な写

真と共におさめられている。各方面の日独の研究者が夫々の分野についての交流の歴史を執筆しているが、内に一日本人医学者とアインシュタインとの心暖まる友好の挿話は印象深いものがある。また、戦後の日独医学交流を自身で体験した人たちがその体験記を執筆しているが、新たな交流が着実に進展していることを示している。

本文は双方の言葉で収録印刷されている。終戦前、ドイツ語一色の医学教育を受けたオールド・ドクターの私には、大変懐かしさをも感じさせる本であるが、戦後の医学教育にて滔々と流入してきた米国医学に強い影響を受けたヤング・ドクターにも西医の曙時代に日本の優れた先達たちがどのように苦勞してドイツ医学を己のものとし、かつ発展させていったかを知ることは、極めて意義のあることであろう。また、ドイツの医師がこの本によって、日独医学の長くかつ深い交流関係を知ることには両国の友好関係の益々の進展に大いに役立つであろう。

●306頁 図・写真245(カラー含む)
1992 定価 16,000円(税別)

シュプリングァー・フェアラク東京 刊